

思考力・表現力を高める授業の創造

副題

～学習集団の育成を通して～

学校名	三原市立幸崎中学校
所在地	〒729-2252 広島県三原市幸崎能地3-16-1
ホームページ アドレス	http://www.mihara.ed.jp/~saizaki-jh/

1. はじめに

本校は昭和23年の開校以来、本校の校章が示す「三つ輪」の教えのもとに、「知・徳・体」を調和させて鍛え、知・徳・体を兼ね備えた生徒の育成を目標に教育活動を推進してきた。平成21年度より教育目標を「自ら学ぶ、心豊かな生徒の育成」とし、次代を担う子供たちに必要な力を身につけさせ、よりたくましく生きていく力をつけていくために日々の教育を進めている。

また、研究主題を『「思考力・表現力」を高める授業の創造』とし、学習集団の育成を通して、その具現化を図りたいと考えている。本校では、本時のねらいを生徒に明確に意識させたうえで個々の考えを深め、小集団の中で自分の考えを表現する機会をつくり、再構築した考えを全体に発表することで学習集団全体を大きく成長させていくことを目指している。

2. 研究の目的

広島県で実施した平成21年度「基礎・基本」定着状況調査の質問紙調査の中の「授業に対する生徒の意識」の項目において、本校の生徒は教科の授業に好印象をもち、授業内容を理解しているにもかかわらず、学習意欲の低さが課題となった。

そこで、ICTの活用が学習意欲の向上につながるという先行研究の研究結果報告を受け、本校でもICTを活用した指導法の工夫改善を図ることを中心に研究を進め、学力向上につなげていくこととした。特に「学びあえる学習集団の育成」を通して、思考力・表現力を高める授業の創造を目指していく。

3. 研究の方法

ICTを学習のための「道具」として活用し、各教科等での指導に役立てる。

- ・ 日常的にICT機器の使える環境を整備する。
- ・ ICTを活用した研究授業を全教職員が実施する。
- ・ 事後研究会(全体研修)の協議を工夫し、個々の教科の指導に活かす。
- ・ 地域の学校との連携を図る。

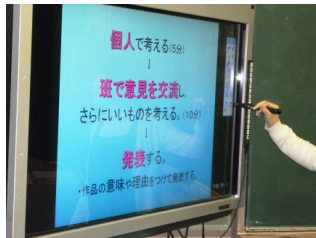
4. 研究の内容と経過

(1) 日常的にICT機器の使える環境整備

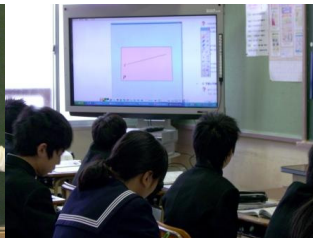
1学年1学級の小規模校である利点を生かし、電子黒板を3台整備し、いつでもどの授業でも電子黒板を活用できるようにした。さらに、特別教室ではスマートボードやプロジェクターを利用できるようにし、手軽にICTを活用できる環境を整えた。



国語



社会



数学



英語

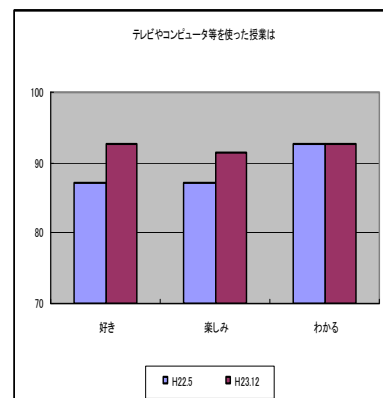
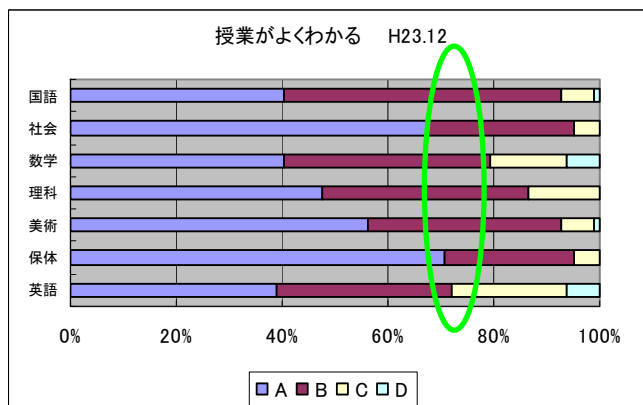
(2) ICTを活用した研究授業の実施

年間一人2回～3回の研究授業を実施しているが、授業の中でICTを活用することとした。さまざまなICT機器を活用することにより、どの場面で活用することがより有効かなど指導法を工夫したり、ICT活用によるデジタル情報と板書や書き込みによるアナログ情報を融合した「思考力・表現力を高める授業の創造」に向けた授業に取り組むなどの授業改善が見られるようになった。



保健体育

その結果、平成23年12月に、生徒に実施したアンケート調査では、「授業がよくわかる」と答えた生徒が全教科で70%を超えている。また、「TV やコンピュータを使った授業」については、肯定的な評価が90%以上だった。



(3) 事後研究会(全体研修)の協議の工夫

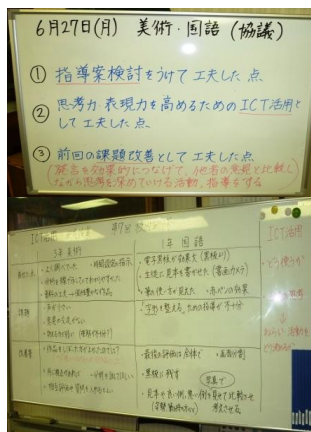
各教科担当1名の本校では、参観の有無にかかわらず、他教科から見た視点での研究協議を実施している。

授業者は、

- ① 指導案検討を受けて工夫した点
- ② 思考力、表現力を高めるためのICT活用として工夫した点
- ③ 前回の研究授業の課題改善として工夫した点

の3点について自評する。

参観者は事前に示されている授業を見る視点に基づき、ワークショップ形式の協議を行う。参観者は他教科であるため、「自分の教科では」「自分の授業に置き換えると」と自分化して協議をすることになる。



事後研究会

(4) 地域の学校との連携

三原市の各学校には電子黒板が配置されており、学力向上対策事業推進地域や視聴覚部会で情報交換を行い、共同で研修会を開催した。



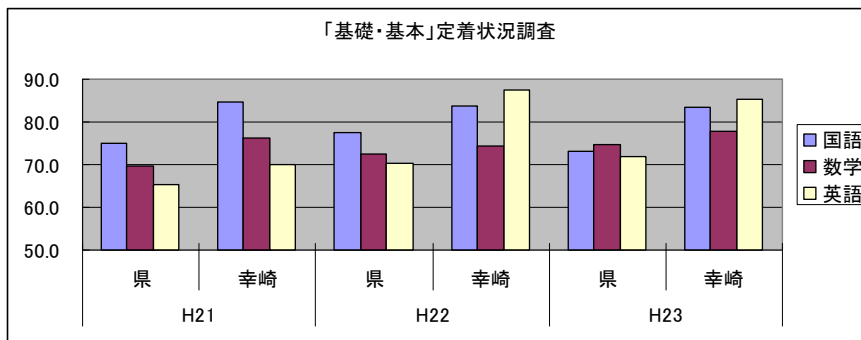
推進校3校との研修会

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

① 基礎・基本の確実な定着

右のグラフは、広島県で実施している「基礎・基本」定着状況調査(国語・数学・英語)の3年間の広島県と本校との通過率の推移を示したものである。



本校は例年県平均に比しておおむね良好な成績を修めているが、本研究を始める前の平成21年度では、県平均を3教科とも同じような割合で上回っていた。

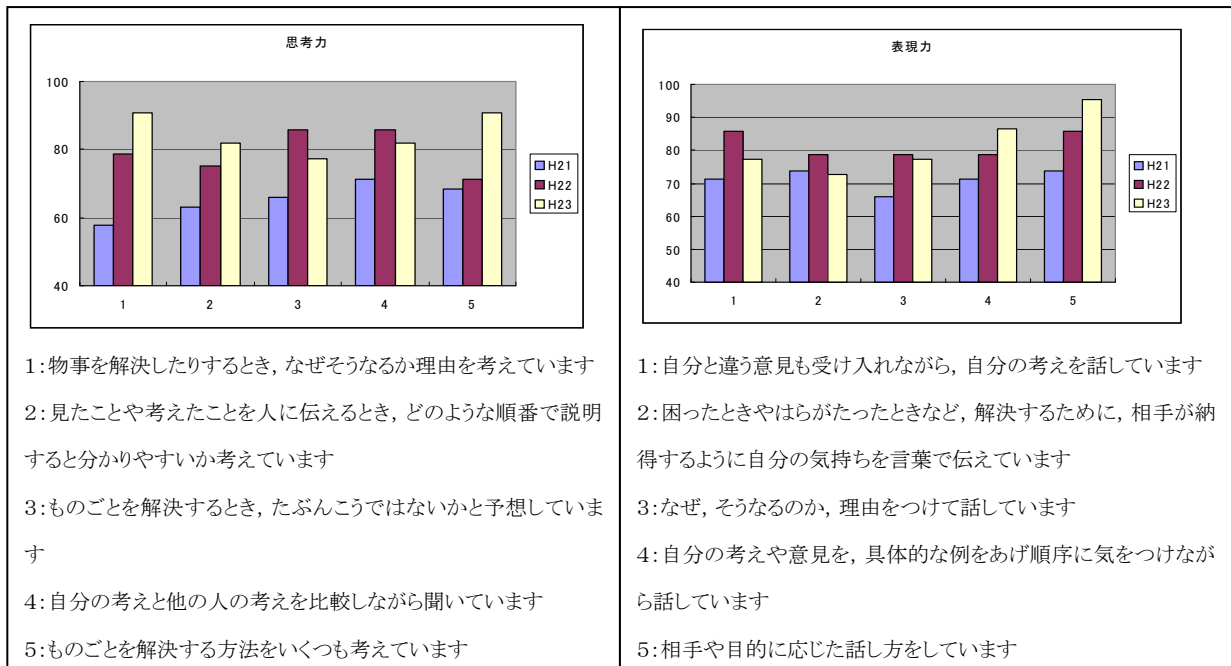
本研究開始後の平成22年、平成23年では、デジタル教科書を常時授業で使用している英語で著しい通過率の伸びを示している。

また、三原市が実施している標準学力調査においても、平成23年度は正答率80%以上の生徒が、国語では51.2%、数学では36.6%、英語では47.6%となっている。教科による差はあるものの半数程度の生徒に正答率80%以上の学力の定着ができていくことがわかる。

② 思考力・表現力の向上

「基礎・基本」定着状況調査の「生活と学習に関する意識・実態調査」から、生徒自身の思考力、表現力に対する意識を見てみると次のようになっている。(下グラフ参照)

思考力・表現のいずれにおいても本研究前の平成21年よりも大きく伸びてきている。特に思考力の「ものごとを解決するとき理由を考えている」が、表現力の「なぜそうなるか理由をつけて話す」



と連動し、思考力の「わかりやすい説明の順番を考えている」が表現力の「順序に気をつけながら話す」につながっているように、思考力と表現力が相互に作用しあって高めあっていることがわかる。

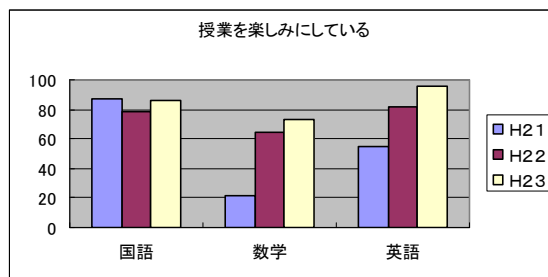
③ 自ら主体的に学ぶ意欲の向上

空き教室を利用した教科型教室は平成22年度までに、社会科・数学科・英語科の3教室であったが、平成23年度後半から国語科教室も整備されたことにより、どの教科でもそれぞれの教室で常設された ICT機器を使用することが可能になった。

また、最新の ICT 機器の購入や使用説明会の開催等により教職員の活用技能や意欲が向上するとともに、ICT 機器の有効性を認識し、より積極的な活用をするようになり授業で使用する頻度が増えた。

これに伴い ICT の活用方法も多様化し、資料の提示や興味づけに利用するだけでなく、電子黒板上に映し出された映像をもとに学習集団で話し合っ

て思考を深めるなど生徒の活用も増えた。こうした教材研究の深化や授業改善により右のグラフのように生徒の学習意欲も向上している。



(2) 課題

- ・ICT 活用に適した単元や教科がある一方で、活用しにくい単元や教科がある。
- ・生徒一人一人が主体となって ICT を活用しようとする際、普通教室(教科型教室)では、パソコンの台数など制限があり、十分に使えない時があった。班活動で調べ学習をしたり、話し合ったりまとめる際には普通教室の方が都合がよいが、逆に情報を得る際にはパソコン教室の方が都合がよい。教室の配置や機材の工夫などが必要である。
- ・授業の中でスムーズに ICT 機器を活用するには、教材の準備等に時間がかかる。

- ・電子黒板と板書の使い分けが充分にできていない。
- ・全教職員で取り組んでいく際、取組みに差ができてきたり、より思考を深めるような使用方法が難しくなったりする場合がある。
- ・教科のねらいを達成するために、ICT機器をどの場面で取り入れることが学習意欲や知識の定着に効果的であるかの研究をさらに深めていく必要がある。
- ・校内や市内の教員と開発・作成した教材を共有化するシステムづくりが必要である。



6. おわりに

各学年1クラスという小規模校である本校は、本研究に取り組むことによりICT機器を常設した教科型教室を整備し、教師や生徒が日常的にICTを活用して授業ができるようになってきた。それに伴い、生徒の学習意欲も向上し、教師の授業改善にもつながり、さらに効果的な活用や市内の教師との教材の共有化を考えるようになってきている。こうした2年間の本研究の積み上げを活かして今後も研究に取り組んでいきたい。

最後に、2年間の助成期間中9回来校し、ご指導と温かい励ましをくださった大阪教育大学の木原俊行先生とご支援をくださったパナソニック教育財団に深く感謝いたします。